

Update Information: 2026/10/04/ 3:01 PM

◆各話へのクイックリンク

お急ぎの方は、クイックリンクから各話へ直接ジャンプしてください。

□ [第一話](#)

□ [第二話](#)

Copyright@2026 D&S

設定資料

「私が工業高校に進学した理由 三学期」

夢雄
美侶

※全話を通しての設定で

登場人物

◎メインキャスト

※シリーズを通してのキャストです

夢前 美優（ゆめさき みう）（十五歳）

身長164センチ

本人は思っていないが、スタイはいい

高校一年生、（増本中学校出身）

成績は普通

ブラスバンド部に「入っており、中学では、

高校ではクラリネットを担当している

人前ではウヴな振りをしているが、内面は超エロエロ

ひとつ ひとよりエロが好き

ふたつ ふふふ とスケベ心

みつつ 見たくてたまらない

よつつ よろけて、わしづかみ

いつつ いかせてなんぼやねん

高谷 智美（たかたに とみ）（十五歳）

身長160センチ

高校一年生

野球部マネージャー

三人の中では背も高くおしやれ

みんなの前では経験済みの振りをしているが、実は経験無し

中学時代は、虐められていた

※智美の過去は二学期編で明かされる

中川 松子（なかがわ まつこ）（十五歳）

身長154センチ

高校一年生（辺富中学校出身）

吉賀に恋する乙女

成績優秀

大学へ進学するためにカメラ屋でバイトをしている

同じ中学校の出身に小島がいる

小村 健一（こむら けんいち）（十五歳）

高校一年生（増本中学校出身）

身長176センチ スタイルもいい

イケメンで、女子にもてる要素をもちながらも、すごく純粋で

世間知らずなところあり。

吉賀 達郎（よしが たつお）（十五歳）

高校一年生

身長 160センチ 体重48キロ 華奢で色白

カリブ海に浮かぶ小国の外交官の息子

海外生活のため、露出など気にならない性格

小村のことが好きである

松村 純（まつむら じゅん）（十五歳）

高校一年生

身長161センチ 体重52キロ

普段は黒縁メガネをかけている

水泳部に所属している

根暗で温和しい性格

実は、服を脱ぐと、見事な筋肉質の肉体を持ち、ボクシング、空手、

などを会得し 喧嘩はかなり強い

※松村の過去は第三部で判明

（補足） 家族構成

■夢前家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅
美優、美穂の部屋が二階にある

父 (現時点・無名)

普通のサラリーマン40代

母 (現時点・無名)
コンピュータ関係の仕事をしており、ITに長けている

姉 美穂(みほ) 美優の二歳年上(十七歳)

秀才で成績は常にトップ

※中学までは、それほど成績はよくなく、中学のある出会いから
猛勉強し超難関国立大学に自宅から通っている

そのためか おしゃれに疎くすっぱんで、服もシンプル

小村家

郊外の住宅地に住んでいる

二階建ての一軒家 よくある注文住宅

父 浩太郎(こうたろう)(四十四歳)

ごくごく普通の会社でサラリーマンをしている

しかし、裏では絶大な人気を誇るアダルト小説を書いており
稼いでいる。家族にはまったく知られていない。

母 明日香（こむら あすか）（四十歳）
専業主婦

妹 明日美（こむら あすみ）健一の一つ下（二四歳）

吉賀家

代々カリブ海に浮かぶ小国の外交官をしている

祖父 吉賀 XXX（現時点・無名）
父 吉賀 XXX（現時点・無名）
母 吉賀 遥（はるか）

中川家

祖母（現時点・無名）
日本海の海岸近くに住む
実は大地主

小島家

郊外の住宅地に住んでいる
二階建ての木造建築
小島の部屋二階の和室
隣が姉（優子）の部屋

優子は、二年生で出演

○クラスメイト

2組の生徒は、3年間持ち上がりのため、変更はありません。

★主要人物

☆準主要人物

出席番号

1 足立 (あだち)

2 井口 (いぐち)

バレーボール部

喧嘩ばやい正確をしている

3 池田 (いけだ)

サッカー部

小島の仲間

4 石井 盆太 (いしい ぼんた)

通称 ボンソワール

☆								
	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5
	小島	木高	桂川	柿本	尾方	太田	遠藤	岩山
	智（こじま とも）	（きだか）	（かつらがわ）	（かきもと）	（おがた）	（おおた）	（えんどう）	（いわやま）
	身長172センチ 普通体系だが、顔が大きいため							
	振り、しかも、怪獣映画に出てきそうな顔							
	山岳部							
	二次元萌えキャラ大好き							
	好きな色は ピンク							
	しかし。二次元キャラに飽き足らず、カワイイ男の子							
	吉賀、松村のことも狙っている							

二年生編では、姉（優子）がおり、美優の姉と同じ大学に通っている事が判明

★

1
3

小村 健一（こむら けんいち）
バスケットボール部

1
4

塩屋 （しおや）
小島の仲間

1
5

柴山（しばやま）

1
6

白石 （しらいし）

1
7

高石 （たかいし）

☆

1
8

滝本 恵（たきもと めぐみ）
ラグビー部

元々、美優、小村と同じ中学出身
がっちりした体格で、高校ではラグビー部に所属
二部の文化祭で、年上のAV女性に好意を持ち、
クリスマスに関係を持ってしまう。
そしてAV女性が、小村の父親と知り合いであり、

滝本にはバレてしまう

19 谷田 (たにだ)

クラスではイケメンボーイでもてる容姿をしている
いつも中林と連んでいる

20 津世 (つせ)

演芸同好会

21 手柄 (てがら)

22 豊国 (とよくに)

23 中尾 (なかお)

バドミントン部

24 中谷 (なかたに)

25 中野 (なかの)

バスケットボール部
身長が高い

3 5	福山	俊雄 (ふくやまとしお)
3 4	福井	良樹(ふくい ラグビー部 よしき)
3 3	百部	(ひやくべ)
3 2	鼻瀬	(はなせ)
3 1	野村	(のむら)
3 0	沼田	(ぬまた)
2 9	新田	(にった)
2 8	永江	(ながえ)
2 7	中山	(なかやま)
2 6	中林	(なかばやし)

★ 36 松村 純 (まつむら じゅん)

水泳部

★ 37 吉賀 達郎 (よしが たつお)

バスケットボール部

★ 38 高谷 智美 (たかたに ともみ)

野球部マネージャー

★ 39 中川 松子 (なかがわ まつこ)

★ 40 夢前 美優 (ゆめさき みう)

吹奏楽部 クラリネット担当

○教師

竹田 (たけだ) 50代

クラスの担任で、てっぺんハゲがあることから、入学早々から
ザビエルとあだ名を付けられる

見た目と違い、生徒思いの良い先生である

☆ 土呂 (とろ) 40代

保健体育担当

ゲイであり、男子生徒の股間を触るのが生きがい

落合（おちあい）男 五十代

工業化学科の教員

山田（やまだ）女 四十代

工業化学科の教員

■その他 （出数は少ないが、物語上 重要な役）

○一学期に登場

マヌカンの店長（名前は未定）推定四十代

吉賀行きつけのアパレルショップ（ディーゼル）の店長

実際は、ディーゼルの日本支社長も兼ねている

当然、男好きで、吉賀が連れてきた小村にちょっかいを出す

スリムで長身の男性

金髪で指には付け爪

○二学期に登場

川崎 (かわさき)

三年一組 デザイン科 三年では一番のイケメンと言われている
大学受験で、推薦入学をしたく、大倉のいいなりになっている

古屋 豪 (ふるや たけし) 推定三十代

※X接点の古屋と同一人物

小村のバイト先に客として登場
男色家である

須賀 小雪 (すが こゆき) 推定 三十代

美人、AV女優をしている

文化祭で滝本と出会い、付き合うようになる

白井 幸子 (しらい さちこ)

智美 中学時代のクラスメートで、智美を虐めていた

○三学期で登場

花北 大悟 (はなきた だいご) ※三学期に出演

露天商で、たこ焼きを焼いている

松村の父を尊敬している

浜田（はまだ）

高校二年生

身長170センチ 体重54キロ 色白で華奢な身体
中学時代は、陸上の長距離をやっていた
美優の一学年上 ブラスバンド部 暫定部長
美優と同じでクラリネットを担当している

二宮（にのみや）通称 ニノ

高校二年生

ブラスバンド部 トランペット担当

浜田に密かに恋をしている

浜野 智恵（はまの ちえ）

高校三年生

ブラスバンド部の元部長を務める

清瀬（きよせ）

高校三年生 浜野と同じブラスバンド部

大柄な男（通称 すもう取り）推定 五十才
会社の経営者

ふくよかな中年女性（通称 まんじゅう）推定 五十才
会社の経営者

ガリガリの中年女性（通称 カマキリ）推定 五十才
会社の経営者

背景

学校（主舞台）について

姫磨工業高等学校（ひめまろこうぎようこうとうがっこう）
美優達が通う高校
県立高校であり

- 一組・デザイン科
- 二組・工業化学科
- 三組・電気科
- 四組・機械科
- 五組・溶接科

六組・情報処理科

で構成される。

各科ごとに校舎がわかれており、敷地はかなり広い
シャワー室を備えた部活棟があり、二十五メートルの屋外プールを備える

クラブ活動

男子生徒が大半を占めているため、女子はマネージャーとなることが多い
・ブラスバンド部

県内一の実力があり数々の大会で優勝している

- ・バスケットボール部
- ・ラグビー部
- ・サッカー部
- ・テニス部
- ・バドミントン部
- ・山岳部
- ・野球部
- ・陸上部
- ・水泳部
- ・極真空手部
- ・Eスポーツ部
- ・鉄道同好会
- ・クイズ同好会

・演芸同好会

○夢前家

若松町

○小村家

○吉賀の住むタワーマンション

新增山（しんますやま レジデンス）

五十階建ての構想マンション 最上階に吉賀が住んでいる

Copyright©2026 D's

目次

目次

「私が工業高校に進学した理由 三学期」	2
全話共通設定 ※全話を通しての設定で	3
◎メインキャスト	3
（補足）家族構成	5
○クラスメイト	8
○教師	13
■その他（出数は少ないが、物語上 重要な役）	14
○一学期に登場	14
○二学期に登場	15
○三学期で登場	15
背景	17
学校（主舞台）について	17
クラブ活動	18
目次	20
第一話	24
サブタイトル「初詣の事件簿」	25
本話について	25
あらすじ	25
美優たち6人は初詣に行きます。	25

Copyright©2026 D's

□ 第一幕 初詣	26
○ (元旦の朝) 夢前家の和室	26
□ 第二幕 待ち合わせ	29
○ (朝) 待ち合わせ場所の駅前	29
□ 第三幕 参道にて	34
○ 神社までの参道 両脇には屋台が並んでいる	34
○ 境内	35
○ 参道	38
○ (ひと気の無い) 公園	46
○ (同) 参道	55
□ 第四幕 駅前	56
○ (昼過ぎ) 最初に待ち合わせした駅	56
(# 回想 # クリスマスに吉賀にキスをされるシーン)	60
□ 第五幕 小村の家でやっちゃた	62
○ 小村家 玄関	62
○ (同) 小村の部屋	64
(# AIによるイメージ画像#)	66
(# AIによるイメージ画像#)	67
(# AIによるイメージ画像#)	69
○ (同) リビング	74
□ 第六幕 その日の夜	75
○ (その日の夜) 小村の家 リビング	75

○小村 父 の部屋	81
第二話	83
サブタイトル「お父さん事件簿」	84
本話について	84
あらすじ	84
登場人物（本話のみ）	84
第一幕（金曜日の夜）小村家のリビング	85
○（夜）小村家のダイニングタ（リビングと続いている）	85
（# 回想 # 正月の小村の部屋の出来事）	86
（# 回想 # 終わり）	87
（# 回想 # 今日の教室で）	90
（# 回想 # 終わり #）	90
第二幕 東京のスタジオ	91
○（翌日）東京の某スタジオ	91
○スタジオのセットの中	97
第三話に続く	107

Copyright@2026 D³S

「私が工業高校に進学した理由 三学期」

第一話

夢雄
美侶

サブタイトル「初詣の事件簿」

本話について

あらずじ

美優たち6人は初詣に行きます。
参道を通っていると松村の知り合いから声がかかります。
さらに、美優たちに災難が
言いがかりを付けられ、公園につれていかれてピンチに
そのピンチを救ったのは？
今回は、松村の過去を少し話をします。
なので、エロはありません。あしからず

□ 第一幕 初詣

○（元旦の朝）夢前家の和室
和室に美優と美優の母親が二人でいる

▽母 美優の前にしゃがみ、美優に着物を着せている

▽美優 立って母に着物を着せてもらっている

「遅れるうよ。お母さん、早く。」

「そんなに、急かすなら、あと三十分早く起きなさい」

「だって正月番組って面白いんだもん。」

「終わったわ」

▽美優 急いで玄関の方に向かう

○（同）玄関

▽美優 玄関にある鏡に全身を映して見ている

美優
母
美優
母

父

美優

父

姉

美優

母

美優

▽父と姉 美優を送ろうと玄関にくる

「お、美優 綺麗だ」

「どう？お父さん」

「美優も着物を着ると、美人に見えるな。」

「まあ、顔は普通なんだけど、スタイルが いいのは認めてあげるわ。」

「お姉ちゃん みたいに 頭でつかちじゃなくて、良かったわ」

▽母 巾着を持って玄関にくる

「もう、あなた達、正月早々やめなさい。美優、間に合わないでしょ」

▽母 美優に巾着を渡す

▽美優 巾着を受け取り、中を確認

「じゃ、行ってきます。」

父 姉 母

母

「正月は変な人が多いから、気をつけてね」

▽美優 夢前家から出る

▽母 振り返り、父と姉を見る

「寝坊するのは、誰に似たのかしら」

「あら、私は違うわよ」

「俺もだ」

Copyright@2026 D'S

□第二幕 待ち合わせ

○(朝)待ち合わせ場所の駅前

▽松子、智美が 先に来てみんながやってくるのをを待っている

松子、智美は着物を着ている

▽美優、急ぎ足で 松子、智美の場所にやってくる

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「わぁ美優の着物カワイイ。」

「ありがとう。智美だって、素敵な色じゃない」

「でしょ。とっても良い色なの」

「松子の花柄も素敵」

智美

松子

美優

智美

美優

智美

美優

智美

松子

美優

松子

小村

「うんうん。花が大きくて、松子にぴったりだわイメージと」

「ありがとう」

「男のたちは」

「もうすぐ着くみたいよ」

○少し離れた場所

小村、吉賀、松村が歩いて近寄ってくる

・小村 ジーンズにダウンジャケット、中はタートルネックのセーター

・吉賀 ジャケットに、カシミアのコート、カシミアのマフラー

中はカシミアのセーター

・松村 黒のスーツに白シャツネクタイ、ベージュのロングコート

「おい」

▽小村、女子に向かって手を振っている

▽松子、小村に気がつく

松子

「男の達も来たようね」

▽小村 吉賀 松村、女子の側にくる

小村

「おめでとう」

吉賀

「ハッピー」

松村

「おめでとう」

美優

「おめでとう」

松子

「おめでとう」

智美

「おめでとう」

▽智美 松村の姿を見る

智美

「今日の松村君、大人って感じね」

松村

「そうかな。おじさんぽくてダメかなあ」

Copyright@2026 D's

智美

「ううん、とっても似合ってるわよ。ね、松子」

▽智美 松子の方を向く

松子

「うんうん。なんか、とっても大人って感じで素敵よ」

美優

「なるほど。確かに、どっかのマフィアのボスみたいだ」

智美

「なに、それ。おもしろい」

吉賀

「夢前さんの例え、すごくわかるよ。渋いよね」

美優

「そうそう」

松子

「吉賀君だって、今日の服 似合ってるわよ」

智美

「うん。高級そうで、どこかのおぼっちゃん って感じ」

松子

「それに、コートも素敵だわ。やっぱりデパートで買ってるの？」

吉賀

「じつは、全部、特注なんだ。家に来てもらって、寸法を測って作ってるの」

(美優)

小村

美優

吉賀

松村

智美

(ああそう、金持ちで、よかったね。股間の部分は大きくしてもらってるんだろ)

「なんか、オレだけが 普段着じゃなかよ」

「なに言ってるの、小村君は、中身で勝負よ」

▽吉賀 松村の顔を見る

「じゃ、僕たちは、中身が無いって事に、なるよね。松村君。」

「そういえば、そうなるね」

「そんな話は あとあと。行きましようよ」

▽美優 智美 松子 小村 吉賀 松村、電車に乗って、

神社のある駅まで移動

□ 第三幕 参道にて

○ 神社までの参道 両脇には屋台が並んでいる

▽ 松子 吉賀、最前列

▽ 美優 小村、つづく

▽ 智美 松村、最後尾

▽ 美優、露店をきよろきよろしながら歩いている

「私、ベビーカーに目がないのよね」

▽ 松子 後ろを向く

「あ、私も。」

「ねね、あそこでガラス細工売ってるよ。見ていこうよ」

「だめだめ、お詣りが先だよ」

美優

松子

美優

小村

松子

▽松子 振り向く

「もう、男子ってこういうところは固いんだよね。」

(美優)

(男は別の所だけ固くしとけばいいんだよ)

○境内

▽賽銭を入れ、拝む六人

(美優)

(今年こそ、小村君をいかせる事が、できますように・・・)

(美優)

(そうだ。一応、姉貴が 大学に合格しますように)

(美優)

(出来れば、離れ小島の大学に行って、二度と帰ってきませんように っと)

▽小村 夢前の顔を見ながら

小村

「夢前さん、なにをお願いしたの？」

美優

「え、えっと、お年玉たくさんもらえますようにって」

小村

智美

美優

小村

松村

智美

松村

智美

吉賀

「えええ」

「めっちゃ子供じゃん」

「いいじゃん」

「美優らしくて、いいかも」

▽智美 美優 おみくじを引く

「どうだった」

▽智美 うれしそうにおみくじを見せる

「じゃーん 大吉」

「高谷さん、やったね」

「去年は いいことありすぎたのに、今年もラッキー」

「神社によっては、大吉は吉の下だよ」

智美

「ちょっと、吉賀くん、私のジョイフルな気持ちを壊さないで」

松子

「そうよ。正月から悪いこと言っちゃだめよ」

吉賀

「ごめんごめん。でも大吉ってすごいね」

▽美優 おみくじをすぐにたたむ

小村

「夢前はとうだったの」

美優

「聞かないで。さっして」

小村

「しよせん、くじはくじだから、宝くじのように当たらないよ」

美優

「ありがとう 小村君」

(松子)

(宝くじと おみくじが同次元って小村君ならではね)

小村

「さて、帰るか」

美優

「やったー カステラだ、カステラ」

智美

「美優ったら」

小村

「俺は、子どもっぽい、夢前がいいけどね」

美優

「もう、小村君 照れるじゃない」

○参道

▽歩いてる六人

▽女A すれ違いざまの松村を見つける

女A

「坊っちゃん」

▽松村 女の方を見る

女A

「やっぱり、坊っちゃんですよん」

松村

「明菜（あきな）さん、遙依（はるい）さん、あけましておめでとうございます。」

▽松村 女二人に挨拶をする

女A

「おめでとうございます。今日は お友達と、初詣ですか」

松村

「はい」

女B

「じゃ、先生は お留守番ですか」

松村

「母は、今日も仕事が抜けられないとのことで銀座にいます」

女B

「そう、相変わらず、忙しいのね。じゃ、坊っちゃんはおひとりでお正月を お過ごしで、淋しいでしょう。」

松村

「いえ、今年は友達と こうして初詣に来て楽しんでますよ」

女A

「そう。お友達と。楽しい正月を過ごされてるようで、よかったですわ」

女A

「あら？もしかして、そちら、彼女さん？」

智美

▽智美 あわてる

「え」

女B

女A

女B

松村

智美

松村

智美

松子

「明菜 失礼よ」

「ゴメンなさいね。それでは。」

「では、また」

「それでは」

▽女A 女B 軽く会釈をして去って行く

▽再び、歩き出す六人。

▽智美 松村に話しかける

「ねね、今の人は、誰」

「ああ、母と同じ美容院で、働いてる人達だよ」

「松村君のお母さんって、美容院で働いているんだ」

「さっき、お母さんは銀座って言ってたけど」

松村

「東京にも店を出してるんだ」

智美

「店の名前は何。今度、行ってみたいわ」

松村

「MJ（エムジエイ）って、言うんだけど」

智美

「え？あの、MJって、全国チェーンの？」

松村

「そうそう」

智美

「超 有名じゃない」

松子

「なんで、お母さんは東京にいるの」

松村

「いちおう、社長なんだ」

松子

「すごい 松村君って、お坊ちゃんじゃない」

松村

「そんなことないよ」

松子

「いま、気がついたけど、MJって松村君のイニシャルと同じじゃない？」

松村

「母が、店の名前を、僕の名前をから付けたって言ってたよ」

松子

「へえ、すごい。」

(智美)

(社長夫人かあ、悪くないわね)

智美

「松村くんが、こんなすごい人だなんて。」

松村

「僕は、なにもすごくないよ。すごいのは、母さんだよ。」

松子

「全国チェーンの美容室でしょ。で、いつかは、社長になるんですよ。やっぱり、すごいよ。」

(智美)

(おいおい、私の旦那、取るんじゃ無いよ)

▽参道を歩く六人六人

▽たこ焼の屋台の前を通る。

▽たこ焼き屋の店主（花北）が、松村の顔を見つける

花北

「あれは・・・」

▽花北 6人の後ろに、少し離れてガラの悪そうな雰囲気のある三人がいることに気づく

花北

「あいつらは・・・」

花北

「おい、マサル、店番を頼む」

マサル

「へい、兄さん、どうしたんです？」

花北

「いいから、頼んだぞ」

マサル

「へい」

▽花北 若い衆に、店番を頼み、美優たちの後を追う

▽歩いてる六人

松子

「ねね。美優、何食べる？」

美優

「私、たこせんが いいな。」

Copyright©2026 D's

智美

「私も それ大好き」

▽智美 後ろを向いた

男A

「あ痛あつ」

▽男A わざとらしく転げる

男B

「おいおい、大丈夫か？」

男A

「ああ、大丈夫だ。」

▽男A ポケットに手を入れスマホを取り出す

男A

「あああああ やってくれちゃったよ」

▽男A 画面にヒビの入ったスマホをみんなの方に向ける

男A

「あーらら。どうしてくれる？」

吉賀

「どうすると言われましても、今割れたとは限らないんじゃないですか？」

男B

「おいおいおい、ぶつかったのは、そっちだぜ。何いってんの？」

小村

「ですから、ぶつかった弾みで割れたんではなくて」

男C

「ここじゃなんだから、あっちに行つて、話しようぜ。」

▽男C 小村と肩を組む

小村

「なんなんですか」

男C

「ここじゃ、話しにくいだろ」

▽男C 小村を連れて歩き出す

吉賀

「ちょっと、小村君」

▽男A 吉賀達の方を向く

男A

「さあ、お前らもついてこい」

▽吉賀、松子、美優、智美、松村 小村の後を追っていく

○（ひと気の無い）公園

▽小村 吉賀 松村 美優 智美 松子 が立っている

▽男A、男B、男C が反対側に立っている

「さあて、どうしてもらおうかな？」

▽小村 一歩前に出る

「だから、それは、僕たちがやったつていう証拠が・・・」

「やかましいわ、お前らも、スマホの画面みたいに、ボロボロにされたいのか！」

▽智美 五人の方を見る

「ねえみんな、もう行きましょう。」

▽男B 智美に近づく

▽男B 智美の腕を掴む

智美

男A

小村

男A

智美

「痛い、何すんの？」

男B

「威勢のいい、ねえちゃんだな」

智美

「離して」

▽松村 一歩前に出る

松村

「止めて下さい」

▽智美 男の腕を払い、松村の後ろに逃げる

男B

「てめえ、こっちに来いや。」

▽智美 松村の後ろに隠れる

▽男B 智美を捕まえようと腕を伸ばす

“ガッシ！”

▽松村 男Bの腕を掴む

Copyright©2026 D's

松村

「止めてくださいって、言ってるのわからない？」

▽松村 男Cの拳を握り絞める

▽男C 痛そうな顔をする

▽松村 男の手を突き放す

▽男C よろけながら松村から離れる

▽男B 前に出てくる

「てめえ。オタッキーみたいな顔しやがって」

▽男B 松村の顔面めがけてパンチ

智美

「危ない！」

▽松村 松村の手のひらが男Bの拳を受け止める

▽松村 腕を回し、男Bを投げ飛ばす

男B

▽男B 転ける

「イタツ」

▽松村 倒れた男Bに近づきしゃがむ

▽松村 男Bの耳元で話す

「一生不自由な生活を送りたいか」

▽男A 隙を見て松子のそばに近づく

▽男A ナイフを取り出す

▽男A 松子を捕まえ、松子の首にナイフを当てる

「おい」

▽松村、吉賀 小村 美優、智美 男Aの方を見る

松村

男A

美優

松子

吉賀

男B

小村

松子

「松子」

「お、お願い、助けて」

「松子ちゃん」

▽男B 立ち上がる

▽松村 松子を見ている

▽男B 松村を背後から蹴る

▽松村 倒れる

「よくも やってくれたよな。たっぷり お礼をしてやるよ」

▽男B 松村の背中を蹴りまくる

「や、やめろ」

「松村くん」

Copyright@2026 D's

男A

「おお、いい気味や。もっとやったれ、やったれ」

▽吉賀 男Aのスキを見つける

▽吉賀 回し蹴りで、男Cのナイフを叩き落とす

▽松村 すかさず立ち上がり、男Bを脚を使ってこかす

▽男B 転ける

▽花北 登場

花北

「おい、お前ら、何してる」

▽一同 花北の方を見る

花北

「いい若もんが、学生さん相手に、なにしてる
なんなら、俺が、相手してやるか」

▽男A 花北の風貌に恐れる

男A

「行こうぜ」

花北

▽男A、男B、男C、去って行く

▽花北 松村のそばにくる

「ぼん 大丈夫ですか」

▽松村 コートの汚れを払いながら

「ええ、大丈夫です」

「大悟さん、おひさしぶりです。」

「大きくなられて。」

▽智美 松村と花北の側にいく

「あのう、助けていただき、ありがとうございます。」

「いやいや、俺が出て行かなくても、あんな奴ら、ぼんなら一人で十分ですよ。」

「大悟さん、その話は無しで」

松村

松村

花北

智美

花北

松村

花北

「そうですか。ぼんなら20人は大丈夫でしょ」

松村

「いえ、さすがに人質をとられると、難しいですよ」

▽松村 吉賀の側に行く

松村

「ありがとう」

吉賀

「え、松子ちゃんの危機だったので、とっさにだよ。まぐれ」

松村

「いや、君がいないと、僕は危なかったよ」

吉賀

「松村君に、そう言ってもらえると照れるな」

▽花北 吉賀の手を握る

花北

「いえ、あなたはボンの命の恩人です」

吉賀

「そんな、大げさな。ぼん、止めてよ」

松村

「大悟さん、ぼんも 止めてください。」

花北

「こりゃ失礼ぼん」

松村

「ほら、また」

花北

「しかし、高石の親方様は、私の恩人です。その恩人の宝ですから」

松村

「父は父、僕は僕です。父も亡くなつたしまいましたので」

花北

「いえ、親方の宝は、私の宝でもあります。
もし。困った事が、あったら何時でも、言ってください」

松村

「ありがとうございます。大悟さん」

花北

「じゃ、俺は店があるので」

松村

「はい。お元気で」

智美

「ありがとうございます」

▽花北 その場を去る

Copyright©2026 D's

智美

「松村君、今のは？」

松村

「昔、父が世話をしていた人だよ。」

智美

「松村君は、母子家庭って聞いてたから、あんまり家庭の事は聞かないようにしてたけど、お父さんも、お母さんも、立派な人なのね。」

松村

「そうかもね。父も、母も、僕にとっては偉大な人かな」

○（同）参道

▽6人 再び 参道を歩き出す

店主A

「ぼん、お久しぶりです。」

店主B

「お元気ですが、ぼん」

▽屋台の店主から、次々と声がかかる松村

智美

「松村くんのお父さんって、すごいよね。」

松村

「僕は、父のように すごい人では無いけど、みんなと出会えて、

父より、ずっと幸せだと思うよ。」

□ 第四幕 駅前

○（昼過ぎ）最初に待ち合わせした駅

美優、松子、智美、小村、吉賀、松村 が集まっている

「今日は楽しかったわ」

「ほんと、友だちと初詣なんて初めてなのよ」

「いつも彼氏と行ってたって落ちじゃないわよね」

「ふふふ。って、そんなこと無いわよ」

「昼メシ まだなんだけど、何か食って帰る？」

「どうしようか」

「実は そんなにお腹空いてないのよね」

「そりゃ、あれだけベビーカーステラ食べてたら、ダメでしょ」

松子
智美
美優
智美
小村
松子
美優
智美

美優

「ばれたか」

松子

「私もそうなのよね」

智美

「じゃ、解散しましょうか」

小村

「そっか。吉賀、松村はどうする」

松村

「僕も、帰るよ」

吉賀

「しょうがないな。僕は付き合ってあげるよ」

小村

「サンキュー」

小村

「じゃ、ここで解散」

智美

「じゃ、学校で」

松子

「みんな気をつけて帰ってね」

美優

「じゃ、帰りましょう」

Copyright©2026 D's

美優

松子

智美

松子

智美

美優

松子

▽智美、美優、松子 三人は歩いてバス停の方に向かう

▽小村 吉賀 松村、女子を見送る

○道

美優、松子、智美、歩いている

「よかった。正直言うと、着物がきつくて、きつくて」

「私も、トイレに行きたかったのよ。ねえ、近くのカフェに入らない」

「二人ともそうなの。トイレに行きたいって言えばいいじゃない」

「だめよ。着物だと時間かかるから、大きい方と思われたくないもん」

「松子たら、変なところに気を遣うんだから」

「私、トイレが広いカフェなら知ってるから そこに行こう」

「いこう、いこう」

○駅

小村、吉賀、松村がいる

「じゃ、吉賀 何食べる」

「じゃ、僕は、ここから電車で帰るよ」

「そっか。悪いな」

「こっちこそ ごめん」

「じゃ、また学校で」

「うん」

▽松村 駅の改札の中に入っていく

「じゃ、どこ行こうか」

「そうだね。今日は、どこに行っても正月料金で高いから、僕の家に来ない」

「え」

小村 吉賀 小村 松村 吉賀 松村 小村 松村

▽小村 吉賀とのクリスマスの日の出来事を思い出す

(# 回想 # クリスマスに吉賀にキスをされるシーン)

▽吉賀 目を瞑り、小村の顔にさらに近づける

▽吉賀 小村にキスをする

▽小村 驚き目を大きくするが、目をつぶり、吉賀のキスを受け止める

(# 回想 # ここまで)

「いや、今日はやめておくよ」

「そうなの」

▽吉賀 悲しそうな顔

「そっだ、俺の家に来いよ」

「え、いいの」

小村

吉賀

小村

吉賀

小村

「もちろん」

吉賀

「でも、正月だよ」

小村

「大丈夫だって」

吉賀

「じゃ、行っちゃおうかな」

小村

「よし、決まり」

小村

▽吉賀 道に出て、手を上げる

「何してるの」

吉賀

「タクシーを捕まえてるの」

#吉賀の前にタクシーが停まる

Copyright@2026 D's

□第五幕 小村の家でやっちゃた

○小村家 玄関

小村 吉賀が入ってくる

「ただいま」

▽小村 母、中から出てくる

「あら、健一 早いわね」

▽小村 母、後ろの吉賀を見る

「お友達」

「クラスメートの 吉賀」

▽吉賀 前に出る

吉賀 「吉賀です。あけまして おめでとーございます。」

小村 母 「あけまして おめでとーございます。さあ、上がって」

小村

▽小村 靴を脱ぎ 家にかかる

「吉賀も あがれ あがれ」

吉賀

「お邪魔します」

小村
母

「お昼ご飯は食べたの？」

小村

「それが、まだなんだよ」

小村
母

「すぐに準備するから、着替えたら下りてきなさい」

小村

「さんきゅー ママ」

小村
母

「もう、止めてったら」

▽吉賀 靴を脱ぎ小村の家にあがる

▽小村 階段を上がり、自分の部屋に向かう

▽吉賀 小村についていく

○（同）小村の部屋

▽小村 吉賀、小村の部屋に入る

▽吉賀 部屋の中を見回す

「これが、日本人 高校生男子の部屋なんだね」

「そうだよ。狭いだろ」

「でも、一人なんだから、これくらいで十分じゃないかな」

「まあ、吉賀に言われても説得率ゼロだわな」

▽小村 ダウンジャケットを脱ぐ

「ごめん、俺 着替えるな。ちょっとベットにでも座っていて」

「ありがとう」

▽吉賀 ベットの縁に座る

吉賀
小村
小村
吉賀
小村
吉賀

小村

「吉賀もコート脱げよ」

吉賀

「そうだね」

▽吉賀 立ち上がり、コートを脱ぐ

▽小村 ジャケットを脱ぎ、中のタートルネックのセーターを脱ぐ
Ｔシャツ一枚になる

▽吉賀 ジャケットを脱ぐ
ワイシャツになる

小村

「中のＴシャツも、汗でびっしょりだ」
小村のＴシャツが汗で濡れているように見える

吉賀

「結構、暑かったからね」

▽小村 Ｔシャツを脱ぐ

小村は上半身裸で下はジーンズ



(#AIによるイメージ画像#)

▽古賀 小村を後ろから抱きつく

小村

吉賀

小村

▽吉賀 小村の背中に顔を付ける

「おいおい、どうした」

「会いたかった」

「ちょっと、待ってよ」

▽吉賀 小村の前に回り、抱きつく



(#AIによるイメージ画像#)

吉賀

▽吉賀 顔を上げ、小村の顔を見る

「小村君は、さみしくなかった」

▽小村 自分を指指す

「お、おれ」

吉賀

「僕は、ずっと寂しかった」

小村

「正月に一人だもんな。わかるよ」

吉賀

「違っよ」

▽吉賀 小村を後ろに押していく

#小村の足が、ベッドの縁にあたる

▽吉賀 小村をベッドに押し倒す

小村の背中はベッタに、足は床に

小
村

(#AIによるイメージ画像#)

▽吉賀 小村の胸に顔を埋める

「ちょっと、ちょっと」



▽吉賀 顔をあげ小村の顔を見る

▽吉賀 手を下げて、ジーンズの上から小村の股間を揉み出す

「ちょっと、止めてくれよ」

「しっ—」

▽吉賀 小村の股間を揉みつつける

「あつ、あ、あ」

▽小村 腰を動かす

▽吉賀 小村のジーンズのベルトのバックルを外す

▽吉賀 小村のジーンズのホックを外し、ジッパーをさげる

▽吉賀 トランクスの上から小村の股間を揉む

「ほら、大きくなってきた」

吉賀

—

小村

吉賀

小村

小村

「あ、だ、だめだって

吉賀

「何がダメなの」

小村

「あう、だ、だめだって」

吉賀

「いつから出してないの。クリスマスから」

吉賀

「じゃ、大分たまってるね」

▽吉賀 小村のトランクスの中に手をいれて陰茎を握る

▽小村 腰を大きく上げる

▽吉賀 小村の陰茎をゆっくりと扱く

「だ、だめ、だめだって」

小村

吉賀

「だめ、ここは出して欲しがってるよ」

▽吉賀 小村の陰茎をさらに激しく扱く

小村のトランクスの中が激しく動いている

小村

「あ、あう まじで、出ちゃうよ」

吉賀

「出していいよ」

小村

「家の中だから、だめだって」

○小村家 一階の階段した

▽小村 母、二階を伺いながら

小村
母

「健一、準備できるわよ。早く下りてきなさい」

○小村の部屋

ベッドの上で、小村の上に吉賀がのっかり、小村の陰茎を扱っている

吉賀

「ほら、早く出さないと、お母さんが来ちゃうよ」

小村

「あ、や、やばい、出そう」

吉賀

「このまま、パンツの中に出しちゃおうか」

小村

「いや、だめだって」

▽吉賀 更に早く扱く

小村

「あ、あう で、でる」

▽吉賀 トランクスから手を出し、トランクスを下げる

▽吉賀 すかさず小村の陰茎を咥える

小村

「あ、あ、あ」

▽小村 足を張り、腰を上下に何回か動かす

▽吉賀 小村の陰茎を咥えて離さない

▽小村 落ちつく

▽吉賀 小村の陰茎から口を離す

吉賀

「飲んじやった」

Copyright©2026 D's

小村
母

吉賀

小村
母

▽小村 無言で深呼吸をしている

○（同）リビング

小村 吉賀、ダイニングテーブルに並んで座り、料理を食べている

▽小村 母 料理を運んでくる

「沢山 食べてね」

「はい、ありがとうございます。」

僕、日本のお正月の料理は初めてです。どれも美味しいです」

「あら、そうなの。沢山食べてね」

▽小村 吉賀の食べる姿を見ている

□第六幕 その日の夜

○（その日の夜）小村の家 リビング

小村 父、母、妹がダイニングテーブルで食事をしている

「ねえ、吉賀君って、どこの国だっけ」

「アメリカの方って聞いてるけど、忘れたよ」

「お兄ちゃん、友だち来てたの」

「そうよ。それも、アイドルみたいな子で、びっくりしちゃった」

「ええええ 私も会っ見たかったな」

「また、連れていらっしやいよ。日本の料理を沢山食べさせてあげるわ」

「日本の料理って、どういうことだい」

「帰国子女ですって。日本人なのに、日本は初めてなのよ」

「健一のクラスにそんな子がいるのか」

小村 母
小村 父
小村 母
妹
小村 母
妹
小村 母
小村 父

小村 妹

「ねえ、帰国子女って、外人なの」

小村 父

「違うよ。簡単に言うと、日本人なんだけど、外国で生まれ育ったみたいなことだ」

小村 妹

「すごい。お兄ちゃんの友だちに そんな子がいるなんて」

▽小村 昼間に吉賀に精液を飲まれたことがショックで返事が曖昧

小村

「でも、時々、ついていけない時があるよ」

小村 父

「ついていけないって」

小村

「それは、いろいろ」

▽小村 母、小村 父の方を見る

小村 母

「そうそう、お父さん、健一ったら、今日は女の子と、デートだったのよ」

▽小村 父、頭をダイニングいる小村の方に向ける

小村 父

「ほう、健一も、そんな歳になったのか。」

小村

「違うよ、友だちとだよ」

妹

▽妹 小村の方を見る

「その中に、本命が、いるんだよね」

小村

「うるさいぞ 明日美（あすみ）」

小村
母

「お兄ちゃんを からかっちゃダメでしょ」

小村
母

「もしかして、彼女とうまくいかなかったの」

小村

「ちがうよ」

小村
父

「どうした健一、元気ないのか」

小村

「そうじゃないんだけど」

▽小村 吉賀のことが気になっている

小村

「しかし、みんな凄いよ」

小村 父

「なにが」

小村

「吉賀の両親は外交官だし」

小村 母

「あら、外交官だったの。どうりで 育ちがよさそうね」

小村

「もう一人の、松村の親は、全国チェーンの美容院をやってるんだよ
なのに、俺んちは、平凡なサラリーマン」

小村 父

「健一は、サラリーマンが、不満なのが？」

小村

「そんなことないけど、やっぱり生活水準が違うよ」

小村 母

「あら、そんなことないわよ。お金なんて、必要なだけあれば、いいのよ。
お母さん、お父さんの稼ぎに、ぜんぜん不満なんてないわよ」

小村 父

「そうそう。母さんの言う通り。金はあればあるほど欲しくなる麻薬みたいなもんさ
だから必要なだけあればいい」

妹

「えええ、でも私、服やアクセサリ——もっと欲しいよ」

小村 母

「そんなに沢山有って 何するの」

妹

「何って」

小村 父

「そうだろ。明日美。よく考えるとなんで、欲しいのかわからないだろ」

小村

「友だち自慢したいからじゃないのか」

妹

「それもあるけど」

小村 父

「その、なんとか言う友だちは、金持ちを自慢したりしてるか」

小村

「ぜんぜん、してない」

小村 父

「本当に金を持つてるやつは、そういうもんさ。金持ち自慢なんて、意味ないよ
自分自身がすくなくいと、自慢なんかにならないさ」

小村

「たしかに。松村もそんなこと言ってたっけ」

妹

「ええ、でも、やっぱり金持ちがいい」

小村 母

「あなたたちには、十分 お小遣いあげてるでしょ」

小村

「明日美は、使い過ぎなんだって」

小村
母

「そうよ、少しは我慢しなさい」

妹

「はい」

小村
母

「そうそう。お父さん、親戚の子ども達にお年玉配るから、お金くださいな。」

小村
父

「そうだな。母さん、十万円あれば、いいかな？」

▽小村 父親 財布から札束を母に渡す。

小村
母

「ほらね、お父さんと一緒になって、お金に、困ったことなんかないのよ。」

妹

「そう言えば、家って、お父さんが家計を握ってるのよね。」

小村
母

「そうよ。お母さん、お父さんが、いくら会社から給与を貰ってるのかも知らないわ。」

妹

「へえ」

小村 母

「結婚してから一度も、聞いたこともないもの。」

小村

「それで、よく家が破産しないよな」

小村 母

「ほら、お父さん 会社で経理をやってるから、任せてるのよ」

▽小村 父 立ち上がり、リビングから出て行くようにする

小村 父

「じゃ、そろそろ、お父さんは、自分の部屋に行くよ」

妹

「え？せつかくの正月なのに。」

小村 父

「ああ、正月休み明け早々に会議が、有るからな。今晚は徹夜で資料作りだよ」

小村 母

「ね、お父さん、真面目に仕事してるでしょ」

○小村 父 の部屋

▽小村 父 二階にある自分の部屋に入る

▽小村 父 パソコンを立ち上げると、ワープロソフトを立ち上げる

ひたすらにキーボードを叩き、文章を打ち始める

(ナレーション)

実は小村のお父さん、趣味で堪能エロ小説を書いており、それをネットで掲載すると大ヒット。今では、何誌もの大人向け週刊誌に連載している。そして、さらには、AVのシナリオライターとしても活躍しているのであった。そのことは、小村の父親が亡くなり、税務署からの督促状が、来るまで誰一人知ることとは無かった・・・

たった、一人を除いては

▽滝本のアップが映る

Copyright@2026

「私が工業高校に進学した理由 三学期」

第二話

夢雄
美侶

サブタイトル「お父さん事件簿」

本話について

あらすじ

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

(ナレーション)

第一幕 (金曜日の夜) 小村家のリビング

「小村 耕太郎 (こむら こうたろう) 四十四才
小村家の家長である。」

妻は、四歳下の 小村明日香 (こむらあすか)

長男 小村健一 (こむらけんいち) 高校一年生

長女 小村明日美 (こむらあすみ) 中学三年生

普段は、なんら普通のサラリーマンとして、家族の為にあくせくと働いている
しかし、裏の顔は

人気エロ小説家であり、何本もの小説を女性週刊誌に連載をしている。
内容も、フェチマ過ぎるためか、その道のマニアから絶大的人気があり、
アダルトビデオ業界にも影響を与えていた。」

○ (夜) 小村家のダイニングタ (リビングと続いている)

▽小村家家族4人 ダイニングテーブルに座って食事中

「はあ、やっと、土日の休みだよ」

「お兄ちゃん、休みの日ぐらい、彼女とデートしなよ。」

「ええーたまの休みぐらい、家ですゲームくらいさせろよ」

小村

小村
妹

小村

小村
妹

小村
母

小村

小村
妹

大体、彼女じゃねえし」

「彼女さん、可愛いそう」

「お兄ちゃん、わかってると思うけど、変なことしちゃダメよ」

「変な事なんて　するわけないよ」

▽妹　小村の顔をじっとみる

「それとも　お兄ちゃん　こっちの方の趣味かな」

▽小村　むせる

（#　回想　#　正月の小村の部屋の出来事）

○（正月）小村の部屋

▽吉賀　小村の陰茎を咥えて吸っている

▽小村　射精して腹を膨らませたり、凹ませたり

吉賀

小村

吉賀

小村

吉賀

小村
父

小村
母

小村
父

▽吉賀 小村の陰茎を口から離す

「飲んじやった」

「え、飲んじやったって」

「だって、小村君、パンツの中に出したくないって言うから」

「それは、そうだけど」

「僕のも飲んで見る」

(# 回想 # 終わり)

○(同) 小村家 ダイニング

「なんだ、図星か」

「もう、お父さんまで」

「冗談、冗談。そうそう、母さん 明日、明後日は東京に出張になるよ」

小村 母

「まあ、土日に大変ね。日曜日の夜ご飯はどうします」

小村 父

「新幹線の中で弁当でも食べるからから、用意はいいよ」

小村 母

「ちゃんと食べてくださいね」

小村 父

「ああ」

小村 母

「土日に仕事って、休みなしになるわね」

小村 父

「まあ、しょうが無いさ。健一の大学だって控えてるしな。少し、貯めておかないとな」

▽小村 妹、父の顔を見る

小村 妹

「お父さん、また 東京出張？」

小村 父

「ああ」

小村 妹

「お土産、よろしくね。」

小村 父

「ああ、明日美は チョコ系だったよな」

小村
妹

「サンキュー パパ」

小村
父

「健一は、何か欲しいものあるか」

小村

「俺はいいよ」

小村
父

「菓子くらい、遠慮しなくていいんだぞ」

小村
妹

「じゃ、お兄ちゃんの分は、私が」

小村

「こら」

小村

「俺、まだ東京って行ったことないんだよな」

小村
妹

「私も。でも、すごく怖そうだもんね」

小村
母

「そうね。ニュースで事件とか多いし、怖いわ」

小村
父

「何を言ってるんだ。東京は日本の首都だぞ。人が多く集まるから、それだけ事件もあるってことだよ。ここと何も変わらないぞ」

小村

「そういえば、クラスの滝本が今週 東京に行くって言ってたな」

(# 回想 # 今日の教室で)

○ (昼休み) 一年二組の教室

滝本、谷田 が席で話をしている
近くに小村たちが話をしている

「いいな、東京か」

谷田

「ああ、ちょっと野暮用で」

滝本

「俺も、東京行ってみたいな」

谷田

「土産 買ってきてやるよ」

滝本

(# 回想 # 終わり #)

「東京って、憧れるよな。父さんも、働くのは東京って決めてたもんな。
実際は、違うけど、東京は、たまに行くがいいのさ」

小村
父

「そんなもんかな。俺も、東京の会社で働いてみたい」

小村

第二幕 東京のスタジオ

○（翌日）東京の某スタジオ

▽小村 父 スタジオに入ってくる

小村父
「おはよう」

スタッフ一同

「あ、小村さん、おはようございます」

▽小村 父 監督に近づく

小村父
「監督さん、おはよう」

監督
「先生 おはよう。相変わらず いいシナリオですね。
撮影するのが楽しみですよ」

小村 父
「監督にそう言ってもらえると、私も、頑張って書いてる甲斐がありますよ」

監督
「それに、いつも撮影初日には わざわざ、遠くからすみません」

小村 父

「やっぱり俳優さんの演技を見ておかないとね。
次のシナリオは、俳優さん達に合わせて書かないと。
それに、今回は、小雪ちゃんが、出てくれるって聞いたから
余計 行かなくっちゃって」

監督

「先生は、小雪ちゃんのファンでもんね」

小村 父

「年甲斐もなく、熱烈なファンですよ
今回の小雪ちゃんの相手の俳優さんは、どんな方ですか」

監督

「今回のビデオ、先生が教師と生徒って設定するから、見つけるの
大変でしたよ」

小村 父

「こりゃ、悪いことした。息子を見ていてふと思いついたら、ついつい
指が動いて止まらなかったんだ」

監督

「いえ、いい作品だったんで、是非とも映像化しないとって、スタッフ達と
頑張りましたよ。」

それでも、いい男優が見つからなくて、そうしたら、
小雪さんが、いい男優も連れて行くっていうから」

小村 父

「え、もしかして、素人さん」

監督

「そう見たいですよ。まあ元々童貞役なんで、丁度いいかもしれないですね」

小村 父

「さすが監督。ネガティブをポジティブに変換できる」

監督

「ここだけの話ですが、どうやら小雪の彼氏のようにですよ。
小雪の大胆な演技のほずが、本当の姿になるかもしれません」

小村 父

「抜け目ないな。俺も、ちょっとその男優さんに会ってみたいな」

小雪

▽小雪 小村 父の姿に気付き そばにくる

「先生。来て下さったんですね」

小村 父

「小雪ちゃんが、出てくれるって聞いたからには、来ないわけには行かないじゃないか」

小雪

「お世辞でも嬉しいわ。」

小村 父

「相手の方はどこに」

小雪

「ちょっと待って」

小
雪

▽小 雪 離れたところにいる男優に手を振る

「恵（けい）ちゃん ちよっと」

小
雪

▽滝 本 打ち合わせしていたスタッフに断りを入れて、小雪の方にやってくる

「今日、私の相手をしてくれる 恵ちゃん 大学生 二十歳」

小
村
父

「恵くん 今日はよろしく」

小
雪

「こちらは、この世界で有名な脚本家の先生。小村さん」

▽小 村 父 手を出す

▽滝 本 手を出し、小村 父と握手

滝
本

「滝本です。よろしく願います」

小
雪

「小村さん、実は、私たちの家の近くに住んでるのよ」

滝
本

「え？」

滝本

▽滝本 小村 父の顔を見て、なんとなく クラウメイトの小村に似ている気がする

「そうなんですか」

小村 父

「こら、小雪ちゃん。個人情報をもらしちゃダメじゃないか」

小雪

「ごめんなさい。でも、いつかは近所なんで、会った時にこまるでしょ」

小村 父

「まあ、確かに。妻と科歩いている所見られると困るからな」

小雪

「でしょ、でしょ」

▽小雪 滝本の方を向く

小雪

「恵君 わかった。もし、小村さんを待ちで見かけても、挨拶くらいで仕事の話をしちゃだめよ。仕事の話をしているのは、スタジオの中だけ」

滝本

「はい。わかりました」

▽小村 父 滝本の顔を見て、で違和感を感じる

小村 父

「しかし、二十歳？若く見えるね。」

小雪

「でしょ。とっても若く見えるでしょ」

小村 父

「AVだけど、大丈夫」

監督

「今回は、高校生という設定なのでしっかりモザイクを入れさせてもらいますよ」

小村 父

「なるほど、その方が、嘘でも真実味があるしね。」

監督

「まあ、小村さん、あんまり詮索は止めておきましょうよ。」

小村 父

「ああ、そうだな。今日は、撮影を見学させてもらうよ。」

小雪

「小村さんに見られるなんて緊張するわ」

小村 父

「小雪ちゃんなら、大丈夫」

（数分後）

○スタジオのセットの中

小雪、滝本がセットの中で監督の指示を受けて撮影している

撮影風景

○ある家に 勉強部屋。

高校三年生の男子学生 ” 恵吾（けいご） ” Ⅱ役の名前 が椅子に座り、
受験生が勉強に励んでいる

▽滝本 学生ズボンの上からアソコを揉んでいる

” トントン ”

ドアを叩く音。

▽滝本 股間から手を離す

「はい」

「小雪よ。」

「どうぞ」

滝本
小雪
滝本

▽小雪 勉強部屋に入っていく

「元気」

「はい」

「じゃ、勉強を始めましょうか。教科書は」

▽小雪 部屋の周りをみてベッドの上のカバンをみつける

「あ、ここね」

▽小雪 ベッドに近づく

ベッドの上には、滝本の洗濯がすんで、たたまれた下着が置いてある

▽小雪 派手な柄のパンツを持ち上げる

「あら、これ」

「先生、人のもの見ないでください」

小雪

滝本

小雪

小雪

小雪

滝本

小雪

「ごめんなさい。最近の男子高校生って、どんなの穿いてるか気になっちゃって。恵吾君んて見かけによらず、派手なの履いてるのね」

滝本

「もう、見ないでくださいよ」

小雪

「いいじゃない」

小雪

「ね、ね、今も、こんなの履いてるの？」

滝本

「どんなのでも、いいじゃないですか」

小雪

「えっ、気になるう。見せてよ」

滝本

「嫌ですよ」

小雪

「さっき、私が入ってくるまで、何やってたか、お母さんに、いっちゃおうかな？」

滝本

「何にも、してませんよ」

小雪

「ウソついてもだめ。また、膨らんだままよ」

▽小雪 滝本の股間を指差す

▽滝本 前屈みになる

「ねね、見せるだけで いいから」

滝本

「わかりましたよ」

▽滝本 ズボンのベルトに手をかける

小雪

「待って、私にやらせて」

▽小雪 恵吾の前に膝をついて座る

小雪

「一度、やってみたかったのよ」

▽小雪 滝本のベルトを緩め、ジーンズをゆっくりと下げる

小雪の目の前には、ボクサーパンツがパンパンに張れた滝本の股間

▽小雪 ボクサーブリーフの上から滝本の股間をさする

小雪

「大きい」

滝本

「先生」

▽小雪 滝本の股間をさする

滝本の股間がさらに大きくなる

小雪

「もっと見せて」

▽小雪 立ち上がり滝本のシャツのボタンをはずす

▽滝本 ボタンが外れたのを確認し、シャツ脱ぐ

▽滝本 腕をあげならTシャツをまくり上げる

滝本の乳首が見える

▽小雪 滝本の乳首を舌で舐める

滝本

「せ、せんせい」

▽滝本 Tシャツを脱ぎ終わる

目の前に小雪の顔

監督

▽小雪 滝本にキスをする

○（同セットの横）小村父が見学をしている

「よし、休憩」

▽滝本 小雪、セットから出てくる

▽小雪 椅子に座って、飲み物を飲む

▽滝本 小雪の横に座り、飲み物を飲む

▽小村父 滝本のそばによる

「滝本君、すごくよかったよ。素人さんだと心配していたけど、それが新鮮ですごくよかったよ」

「ありがとうございます」

「でしょ、でしょ」

「ところで、滝本君、本当に大学生」

小村父

滝本

小雪

小村父

▽小雪 滝本、すこし慌てる

小雪 「当たり前じゃないですか」

滝本 「そ、そうですよ」

小村父 「こりや失礼」

小雪 「いやだわ先生、急にそんなこと言うなんて」

小村父 「そうだよな。あ、そうそう、俺の息子、健一って言うんだけど、その友達が
今日、東京に遊びに来てるって聞いてたもんで」

小 雪 「あら、先生に息子さんいらっしゃったのね」

小村父 「そりゃ、妻子もいるよ」

滝 本 「ちょっと、小村さん」

小村父 「なんだい」

滝本

「ちょっと、こっちで話ませんか」

小雪

「あら、なあに。私には秘密」

滝本

「男同士の秘密です」

▽滝本、椅子から立ち、スタジオの端に向かって歩き出す

▽小村 父、滝本についていく

▽滝本 立ち止まる

▽小村 父、立ち止まる

滝本

「小村さんは、気づいているんですね」

小村 父

「ああ、人間の洞察力は人一倍優れているつもりだからね」

滝本

「黙っていてくれませんか」

小村 父

「俺は、話をするつもりはないが」

滝本

「ありがとうございます。俺も、息子さんには、今日のことは一切話しません」

小村 父

「わかった。お互い 秘密でいよう」

○小雪が座っている椅子

小雪

「ちょっと、二人でいつまで話してるの」

小村 父

「ごめんごめん。もう、終わったよ」

▽滝本 小村、小雪の方に戻ってくる

小村 父

「さあて俺は、帰るか」

小雪

「もう、帰るの」

小村 父

「さっきも言っただろ。妻子持ちだって」

▽小村 父、滝本の方を見る

小村 父

「滝本君は男なんだから、小雪ちゃんをしっかりとリードするんだよ」

滝本

「はい、先生」

小雪

「二人とも、急にどうしたの」

小村
父

「それと、スタジオ以外で会っても、それは他人としてふるまうこと。決してスタジオ以外で声をかけるな。それが、この世界のルールだ」

滝本

「はい」

小村
父

「それじゃ」

▽小村 父、スタジオから出ていく

Copyright©2026 D's

「私が工業高校に進学した理由 三学期」

第三話に続く